



灘高等学校長 和田 孫博

私は神戸にある灘中学校・高等学校出身で、京都大学文学部（英文学専攻）を卒業後すぐに、母校に就職し現在に至っている。その意味では「井の中の蛙」であるが、「灘校」については誰よりもよく知っている。校長になって十年が経ったが、中学1年生に毎年校史を教えてきて、あらためて嘉納治五郎の偉大さを痛感している。未来を支える若者の為に、国際人としての嘉納治五郎について語ってみたい。

おいたち — 講道館創設まで

嘉納治五郎の生家は菊正宗酒造を経営する本嘉納家の分家筋に当たり、廻船問屋を営んでいた。治五郎の父、次郎作は明治維新後、勝海舟の推薦を受けて新政府に仕えるため上京。治五郎は12歳で私立育英義塾に入学し、英語・独語を学び、官立外国語学校に入学、英語を学んだ。14歳で官立開成学校（途中で東京帝国大学に改称）に入学、政治学や理財学を学んで卒業、英語力の上に、実学も哲学的教養も身につけた。

嘉納治五郎は身長160センチ足らず、身体が弱いというコンプレックスがあったか、柔術の道場に通ったが、いくつかの流派、それぞれの教えがかなり異なる。そこで、同輩や後輩を集めて自分たちの道場を開いた。これが講道館の始まりである。治五郎21歳の時。

若い頃から柔道の国際的普及に尽力

22歳で専科を卒業して学習院に勤め、26歳で教頭に昇進。ヨーロッパの教育視察に派遣され帰国後、熊本の第五高等学校長に就任。英語教師として赴任してきたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）にも柔道を手ほどきしている。感銘を受けたハーンは随筆集で「Jujutsu」という文を載せ、外国人として初めて柔道を紹介した。

治五郎は、1893年に東京高等師範学校の校長に就任し、大正期から昭和初期にかけての四半世紀以上に亘り、全国の小中学校の幹部教員を送り出し続けた。

講道館館長としても普及のための施策を展開。1893年には女子の門下生を受け入れている。1896年からは、清国の留学生を私費で受け入れることも始めている。講道館の門下生が欧米で柔道の紹介と普及に努め、柔道は徐々に世界的スポーツとして認められるようになっていった。

アジア初のIOC委員へ — 一貫した国際協調主義

1894年、クーベルタン男爵は、国際オリンピック委員会（IOC）を結成し、1896年アテネで第1回を開催。以後4年ごとの開催を軌道に乗せるが、当時東アジアの国はどこも不参加であった。

クーベルタンは、1908年の第4回五輪ロンドン大会の後、駐日仏大使に日本人の推薦を依頼。翌年、嘉納はアジア初のIOC委員に就任した。第5回五輪ストックホルム大会に2名の選手を連れて初参加。第7回アントワープ大会では、テニス日本人初めてのメダ

ル（銀メダル）を獲得。大会後、嘉納はロンドンで柔道の実演と講演を行っている。

1924年にアメリカで移民法が施行され、日本からの移民が全面禁止となった。嘉納治五郎は、両国民の理解を深めることが重要だと主張し、1927年に日本英語協会を設立し、名だたる英語学者が集まる中、初代の会長に就任。一貫して国際協調主義を取った。

「精力善用」「自他共栄」の講道館精神を唱道

1922年に文化活動の推進を企図して講道館文化会を設立。嘉納治五郎の講道館精神を表す「精力善用」「自他共栄」はこの設立時に発表された。この二つの言葉は別々のものではなく、両方が揃って初めて意味を成す。国同士にも当てはまり、他国と協働して平和な世界を構築していく、国際協力にも繋がる思想である。

灘中学校創設の顧問として

嘉納は、自分で学校を創設しようと考えたが、多忙を極めて計画を断念。矢先、出身地御影の人たちから、私立の中学校を創りたいと相談を受けた。

現在の阪神間と呼ばれる地域は、財界人が好んで住居を構え、子弟教育に熱心であった。神戸一中（現神戸高校）を筆頭に公立の中学校への進学は極めて難しい状況で、不足していた。治五郎は、東京高等師範学校での教え子の中から気骨ありと見込んだ者を校長に推挙した。静岡県伊豆出身の眞田範衛、30代後半という若さで、すでに京都の亀岡高等女学校の校長だったのを引き抜いた。眞田は翌年1928年の春に開校にこぎつけた。

嘉納はその間何度も足を運び、眞田の相談に乗るとともに、建学の精神として「精力善用」・「自他共栄」を掲げ、現在に至るまで、校是として灘校教育の精神的柱となっている。開校後もたびたび訪問し、生徒たちを講堂に集めて訓話を施している。

東京オリンピックの夢

嘉納は、オリンピックの日本開催を考え、永田東京市長の思いも一致し、1940年の開催国として立候補。1933年に国際連盟を脱退し政治的には世界の孤児となった上に、「ファーイースト」と呼ばれる日本と欧米の距離の問題もあった。当時は、船で何週間もかかった。プレゼンティーターとして演壇に上がった嘉納は、「1912年のストックホルム大会以来、日本はオリンピックへの出場を継続している。もし遠距離を理由に日本にオリンピックが来ないのであれば、日本からヨーロッパへの参加もまた遠距離であるから、出場する必要はないということになる」と発言し、アジア初のオリンピック招致に成功した。この時嘉納は75歳。

1938年エジプトのカイロでのIOC総会に出席し、帰途、氷川丸船上で肺炎に罹り、帰らぬ人となった。嘉納の晩年の大半はこの東京五輪開催に捧げられた。

その2か月後、日本は、日中戦争の泥沼化などから五輪開催権を返上した。

嘉納の夢が引き継がれた1964年の東京五輪

その後日本は太平洋戦争への道を辿り、1951年、サンフランシスコ講和条約を経て、1959年のIOC総会で東京五輪の開催権を勝ち取った。その時、日本の五輪招致の最終演説をした平沢和重は、治五郎が最期を迎えた氷川丸にたまたま乗り合わせていた外交官で、嘉納の最期を看取った人だった。

彼が招致演説の演壇に立った時、司会者からその旨が紹介されると、会場は静まり返った。嘉納の演説を意識して、「西欧の人々は、日本をファーイーストと呼びますが、ジェット機時代を迎えたいまは、ファーではありません。国際間の人間同士のつながり、接触こそが平和の礎ではないでしょうか。」と呼びかけた、わずか15分の演説であった。


結果は最初の投票で過半数を得る大勝。嘉納が心血を注いでも見果てぬ夢に終わった東京でのアジア初のオリンピックが、ついに実現した。

この東京五輪から、柔道が正式種目として採用された。

グローバル人材とは

灘高出身の前東大総長の濱田純一は、学生に向けて「よりグローバルに、よりタフに」を掲げた。彼が言う「グローバルな力」とは、地理的な次元ではなく、現在の自分が所属する世界では経験しないような未知なる課題に直面した時に、おじけづくことなく対処し解決する力である。嘉納治五郎はまさに強靱なグローバル力の持ち主であった。

これから未来において未知なる課題に対峙していかねばならない若者たちに、ロールモデルとして推薦する。

2017年9月10日脱 

(詳しくは本文 <https://goo.gl/gZ9DnE> をご覧ください。)

執筆者紹介:

和田 孫博 (わだ まごひろ)

学校法人 灘育英会 理事
灘中学校・灘高等学校 校長



略歴

1952年 大阪市生まれ

1971年 灘高等学校卒業

1976年 京都大学文学部文学科(英語英文学専攻)卒業

1976年 母校に英語科教諭として就職

2007年 同校校長および学校法人灘育英会理事に就任 現在に至る

兼務歴

2011年～2014年 文部科学省中央教育審議会 高等学校教育部会専門委員

2013年～ 兵庫県私立中学校高等学校連合会常任理事

日本私立中学校高等学校連合会評議員

2017年～ 京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

専門分野:

私立中学校・高等学校の教育経営

研究テーマ:

公私協調の施策

高大接続改革

嘉納治五郎の教育哲学

ご意見、賛同、助言、ご提言を当財団までお寄せください。

一般財団法人「未来を創る財団」事務局 パブリック・コミュニケーション担当

abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

© 2017 The Outlook Foundation, All rights reserved.